

# 上三川 近代化の歩み

明治維新から戦前まで

## 電信・電話の発達

### 情報伝達技術の近代化

日本では、明治の初めに近代的な郵便制度が確立し、手紙を全国に確実に運べるようになりました。誰でも手紙を書けば、相手に情報を伝えられるようになったのです。しかし、郵便では、必要な時に瞬時に情報を伝えることができません。そこで生まれたのは電信と電話でした。

電信という言葉は、皆さんにとって耳慣れない言葉かと思いますが。文字を符号化して電気信号に変え、伝送することを電信といい、送られた先で、電気信号を文字に復元したものを電報といいます。日本で電信業務が開始されたのは明治2年でしたが、上三川町で開始されたのはこれよりも後のことです。明治30年代に、郵便業務の形態が整うと、やがて電信・電話の開通を望む声が商工業者を中心に高まりました。しかし、電信開設工事には多額の寄付金を必要としたため、明治44年に上三川町役場で町会議員・区長・有志を集め、上三川郵便局に電信設備を設置するための説明会が開催されました。その後800円（現在の約90万円）の寄付金を集め、翌年の1月21日に電信業務が開始され、17年後の昭和4年の発着信



昔懐かしい黒電話は戦後の主役でした

回数は13、000回にのぼり、人々の生活に欠かせないものとなりました。

一方、日本で明治23年に開始された電話業務も、上三川町で開始されたのは後のことです。大正5年に栃木県内では3、372名の加入者がいましたが、町内には一人の加入者もなく、ようやく大正9年に、上三川郵便局に電話が開設されました。しかし15年後の昭和10年になっても、上三川町内では39名の加入者しかなかったことから、一般の人々には手が出せるものでなかったことがわかります。しかし、大正11年の一加入者あたりの通話回数をみると、区域内だけでも3、500回にもなることから、加入者以外の多くの人が使っていたことが考えられます。

このように、電信・電話技術の発展によって、情報が瞬時に伝えることができるようになりました。また、遠隔地とのやり取りが活発化することにより、上三川町の益々の発展につながりました。

## 名報短歌

今も尚添ふ温もりの恋ほしくて

思ひ巡れる園のベンチに

小島 キミ

水仙の蕾ゆるめる小春日を

飛び来し蠅の障子にあそぶ

稲葉 敬子

農に賭け貧しさに耐えし人生なれど

共に齢の重ね来しのみ

高田 幸子

初明り多当ひらくに匂ひきて

過去とならざる過ぎ去りを呼ぶ

沢谷 郁子

眼うらに残りし母の長き指

ふしのみ高く糸紡ぎおり

高橋 ツギ子

にび色の空にとほりし鶉の叫びに朱き豆柿ふるえり

斎藤 アツ子

亡き父の植えし八つ手の花咲きて

命きおえる四十年の間を

井沢 和江

落とし物拾ふ心地で「人間だもの」の

テープ聞き居り小春日の縁

武藤 ひさ

ひさかたに浮雲仰ぎゆとりめく

様に秘めたる心和めり

菊地 美代